2013年12月16日 中日新聞 朝刊 19頁

先見の堤防 復興加速

和歌山・広川町 一石二鳥の偉業

震災をめぐる歴史で、尾末の「稲むらの火」は美談として知られている。一八五四（安政元）年十二月二十四日（旧暦十一月五日）の安政南海地震で、紀州藩広村（現・和歌山県広川町）生まれの実業家浜口梧陵（写真）が稲のわらに火を付け、村人を津波から救った史実だ。ただ、浜口がその後、復興と防災を兼ねて村人と堤防造りに尽力したことはあまり知られていない。東日本大震災の被災地で復興が進まない中、浜口の「その後」の物語に学ぶことは多い。（中沢誠）

安政南海地震は、現在想定されている南海トラフ巨大地震に似たケースだった。太平洋の海底で複数の震源域が連動して発生。近畿・四国地方をいた千葉から村に戻っていた浜口は暗がりの中、村人を避難させようと稲わらに火を放つ。貴重な稲わらに火を放つ行為は推定6強の揺。その後の災害から救った。醤油醸造を営んでいた時代の作家ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が書いた短編は、戦前の国語の教科書に掲載された。

「梧陵がすごいのはむしろ、その後です」。浜口の偉業を伝える防災館「広村堤防館」（広川町）の熊野亨館長は語る。

「住民百世の安堵を図る」と決意した浜口。私財を投じて高さ約五メートルの堤防を築造した。村が再び津波の被害に遭わないよう、田畑を失った村人に堤防工事を担わせることで収入と生きる希望を与え、離散を防いだ。広村は一九四六（昭和二十一）年の昭和南海地震で、再び津波に襲われたが、堤防により大部分は被害を免れた。

国の中央防災会議専門調査会の委員を務める河田惠昭・関西大教授（防災・減災論）は「防災と復興を兼ねた梧陵の行動は、今の東北の復興にも参考になる」と評価する。東日本大震災から三年近くたつが、復興の道は険しく、生活のため被災地を離れる人も多い。それだけに、浜口の見識に目を見張る。

ハーンが「稲むらの火」を取り上げたのと対照的に、河田教授は「その後」にも焦点を当てた浜口の伝記「百年後のふるさとを守る」を執筆。二〇一一年度から光村図書出版の小学五年の国語教科書に採用されている。

伝記の中で、河田教授はもう一つ、堤防造りから学ぶ教訓を挙げている。「村人同士が互いに助け合いながら、自分たちが住む所を守る意識を持つように促したこと」。つまり、自助と共助の意識だ。

「先人の教えがあっても他人任せでは伝わらない。日本人は、まだ自助努力という意識が希薄。自分の身は自分で守るという意識を育むことが求められている」。河田教授はそう説く。

浜口が造った堤防は今も残る。地元では、浜口の教えを語り継ごうと毎年十一月五日、堤防で「津浪祭」を開催。たいまつを手に当時を再現した火祭りも今年で十一回目を数える。

浜口梧陵　1820（文政3）年、紀州藩広村に生まれる。代々、千葉県銚子市で醤油醸造業を営む浜口儀兵衛家（現・ヤマサ醤油）の7代目当主。銚子市と広村を行き来していた。私塾をつくり人材育成にも尽力。勝海舟や福沢諭吉とも交流を持った。明治時代に入ると、政府の招きで郵政相に相当する初代の郵遞頭（えきていのかみ）を務めた。85（明治18）年、欧米視察中に米ニューヨークで病没。享年64。

津波の教訓 石碑に墨入れ

東日本大震災では復興が進まないと以外に、「風化」も問題となっている。大阪では安政南海地震の悲劇を忘れまいと、今も受継ぐ人々がいる。

大阪市浪速区

地震では津波が木津川や安治川を逆流し、堀川まで達した。上流に押し上げられた船が次々と橋を破壊。川舟に避難した人らが多数犠牲になった。

実は、この地震は、大阪の人々にとって苦い体験だった。当時から百四十七年前の一七〇七（宝永四）年の宝永地震でも、同じように川舟に逃げた人たちが津波のために亡くなっていたからだ。

風化していた震災の記憶。その反省から、震災翌年の一八五五（安政二）年、現在の京セラドーム大阪の近

上がることがある」などと、防災の心得を刻んでいる。石碑は最後に「願わくは心あらん人、年々文字よみ安きやう墨を入れたまふべし」と結んでいる。

百五十年以上たった今も、住民は先人の教えを守り、毎年八月の同じように多くの人が亡くなった」とつづれている。「大地震のときには「より多くの人に関心を持ってもらいたいない」と、地元有志で石つける」「海辺の新田では泥水が大量に噴き上がる」年十月、地蔵菩薩に石碑に墨入れている。二〇〇七年津波が起こると心得て絶対に船に乗ってはいけない」「火災に気をつける」「海辺の新田碑の内容をまとめた冊子も作った。

石碑は「年月がたてば伝え聞く人もほとんどいなくなり、今また亡くなった」とつづれている。「大地震のときには「より多くの人に関心を持ってもらいたいない」と、地元有志で石碑の内容をまとめた冊子も作った。

大阪府は今年十月、南海トラフ地震による人的被害の独自想定を公表。死者の85％超にあたる約十一万四千人が津波で犠牲になると推計した。

大阪の津波の歴史に詳しい歴史地震研究会会員の長尾武さん（76）＝大阪市＝は「安政南海地震以来、大阪は津波が来ない。津波が来る多い。石碑は津波が人も「ことでないことを警告している」と語る。

次回は、来年1月6日に掲載します。よいお年を。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています